

## 食文化を高め心の中に平和の砦を

清水 益雄（天王台在住）一九二八年生

戦中は「欲しがりません勝つまでは」、戦後は「負けたんだから仕方ない」と言われ、心身共に耐えに耐えてきた。特に食べ物はひどいもので、味とかカロリーとか栄養などは論外で生きるための糧に過ぎなかった。それが現在は正に飽食時代、高カロリー偏り栄養の食事で肥満に苦しんでいる。一方、未開発国では食糧不足で沢山の子供達が餓死している。また、一端、地震や洪水などの災害や大きな事故が起きると保管や輸送問題等で忽ち窮地に陥る。人間は食料無しで生きてはいけぬ。日本の食文化は優れた面も多く内容も充実しているが、食材の大半は輸入に頼っており、極めて不安定である。温暖化現象などによる自然災害の多発が予想される現在、食料は「自給自足」の原点に立ち、食育に真剣に取り組まなければならない。育ち盛りの子供には食の大切さやそれを作る人々への感謝の気持ちを教え、成人に対しては栄養のバランスを考え食事の周知徹底を急ぐ必要がある。幸い千葉県は農業県であり、栄養価の高い野菜類の宝庫なので、世界語の「もったいない」を文化として導入することが出来るのではないか。

食文化研究推進懇談会（会長・茂木友三郎キックマン会長）では、官民連携で日本食人口倍増計画に取り組んでいる。超長寿国の日本を支えているのは日本食と言っても過言ではあるまい。ユネスコ（国連教育科学文化機関）憲章の前文の中に「戦争は人の心の中で生まれるものであるから人の心の中に平和の砦を築かなければならない」という一節がある。戦争の原因を突き詰めていくと「先入観や思いこみ」「偏見」「誤解」などで起こる場合が多い。食文化を高めて心を豊かにし、

人間一人一人の心に平和の砦を築いておけばあの愚かで悲惨な戦争を防ぐことが出来たのではないか。

地球上には約六十八億の人が生存しているが、と同時にその人々を瞬時に破滅させてなお余りある程の核兵器が存在している。我孫子市在住の元高校教師のお話によると、百メガトンの水素爆弾の破壊力は、想像を遙かに超えるもので、四トントラック二千五百万台分の火薬を爆破した時の破壊力に相当し、仮に東京都に落とされた場合、一千万人の都民が一人あたり四トントラック二台半の火薬を一身に浴びることになるといふ。核兵器廃絶は全人類の願いであり、この廃絶無くしては世界の真の恒久平和はあり得ないが、核兵器保有国から彼らの闘争本能、軍縮、戦争放棄、核兵器の廃絶を望むことは容易なことではない。

避雷針を発明した科学者であり政治家であったベンジャミン・フランクリンは、「善い戦争や悪い平和などというものは一つもあつたためしがない」と明言しており、第三十五代のアメリカ大統領のジョン・F・ケネディは「人類は戦争に終止符を打たなければならぬ。さもなければ、戦争が人類に終止符を打つことになるだろう」と警告している。また、広島・長崎に投下された原子爆弾について、偉大な理論物理学者であるアルバート・アインシュタインは「私は人生でまちがいを一つおかしました・・・原子爆弾を造るよう勧める手紙に署名したことです」と後悔している。

現実には厳しい。武力戦争は繰り返され、自爆テロは頻発し、大量の核兵器が存在し、その製造が外交手段に使われている。こうした世界情勢の中で、唯一の被爆国である日本は「非核三原則」を貫き、いかなる国のいかなる核兵器に対してもその廃絶を求めていく大任がある。一方、自然災害は大型化し増加の一途を辿っている今日、一日も早く食文化を高め心の中に平和の砦を築くよう世界に向けて発信して行かねばならない。

## 我が激動の歲月

白石 孝夫（久寺家在住）一九三〇年生

私は戦争について回想するとき、いつも思い出されるのは、小学校入学を迎える六才のときの体験である。当時私は、東大赤門の近くの本郷に住んでいた。昭和十一年二月二十六日は東京では大雪に見舞われた。そんな折り突然、朝方家の前の道路が騒がしく雪道を小走りに通りすぎる集団の靴音に、無気味さを感じた。後にそれが、二、二六事件の兵士の動きであったことを知り、子供心にも忍び寄る戦争の予兆の様に感じられてならなかった。

翌年七月七日には、盧溝橋事件を発端に、日中戦争に突入し町内では多くの若者達が赤紙召集され、連日のように在郷軍人<sup>注9</sup>の活躍で神社での壮行会が行われ出征して行かれた。町では出征軍人<sup>注10</sup>の武運長久を祈り、千人針を女性達が懸命につくり贈る姿が見られた。

戦況も緒戦は華々しく、十二月には南京が陥落し、東京では奉祝のため、皇居前広場までの提灯行列が行われ、私も母と共に参加した。然しその後、戦況は米国の対中支援もあり、中国軍、民の抗日運動も激しさを増し長期化、泥沼化の様相となった。

昭和十五年、父が京浜急行の関係事業のため大森に転居した。私は小学校を転校せず、本郷まで二年間遠距離通学を続けた。

翌年十二月八日、東京は冬晴れの寒い日だった。早朝ラヂオで大本営報道部長の甲高い開戦報道を聞き大変緊張と不安を

覚えた。

町には真珠湾攻撃の華々しい戦果に歓声が上る日々で、新聞ラヂオに耳目を注いでいた。然し程なくして、海軍特殊潜航艇<sup>注101</sup>の一員であった岩佐少尉の戦死の新聞記事を見て愕然<sup>がくぜん</sup>とした。岩佐家は大森の食品缶詰問屋で家のすぐ近くだった。戦争が身近な人々のなかに色々なかわりを持っていることが痛感され、戦争の悲惨さに胸の痛む思いがしてならない。

太平洋戦争を顧みる時、日本が華々しく戦果をあげ、順調に推移したのは、昭和十七年二月に英領シンガポールが陥落し山下陸軍大将の歴史的降伏調印の会談までの様に思われ、その後戦況は好転する気運は見られなかった。新聞報道は善戦の景気の良いものだったが、国民のなかに懐疑的な空気が静かに広まりつつあった。そんな戦況下、予想もしない爆撃機<sup>ばくげきき</sup>が四月初旬に東京に飛来する事件があり、突然の出来事に大きな衝撃を受けた。然し何故か新聞ラヂオでは、さしたる報道はされなかったと記憶している。

私は昭和十七年に中学に入学して勉強に専念したのは二年間だけであった。三年生になって東京の空襲に備えて家屋の延焼を防止するための施策がとられる様になり家屋の間引き取り壊しの作業が開始され、早大生がリーダーとなり中学生と共働で道塚町の住宅地を中心に行い、立派な家を無惨にとりこわすことに悲しい思いをしたものである。

大学生も徴兵免除も解かれ、学徒動員の壮行会が十月に神宮外苑競技場で行われ歴史に残る「雨中の大作進」のニュース映画が流れ、奇しくも私の中学入試の折り家庭教師としてお世話になった大学生の宇野守道さん（作家宇野浩二の子息）の勇姿を発見したのは大きな驚きだった。彼は中国に派遣され戦後二年目に復員したが暫らくの間、帰還船業務にたづさわりの後文春に入社、編集部次長を最後に退社された。

昭和十九年六月には、勤労学徒動員にて三菱重工業に派遣され、電気溶接の仕事に配置され現場組長のもとで三ヶ月の実

地指導を受けた後、戦車の車輪部分の溶接作業に従事した。当時十四才の少年に厳しい仕事で眼や気管を痛める生徒も多く、私も終戦直前に気管支のため短期間療養休暇を受けてしまった。動員された学校は旧制高校、中学校、女学校計四校で総勢約二百名程度に及んだが、戦車の生産量もギリ貧の状況で先行きに不安と焦燥にかられる日々であった。

戦況は悪化するばかりで、六月サイパン島も落ち本土空襲の本拠地と化した。東京も間もなくB 29の襲来を見るようになった。工場周辺も空襲に見舞われる様になり、或る日大規模な空襲を受け生徒達が防空壕に避難し皆恐怖と不安におびえ無言で身をすくめていた。そんな雰囲気の中、暫らくして突然一人の友達が「花摘む野辺に日は落ちて・・・」と歌を歌い出したのだ。信じられない光景だったが、そのうち一人二人と歌い始め皆が斉唱した。私は不安の極限の中こんなことがあるのかと、今でも当時を感慨深く思い出してならない。みんなを元気づける心根と優しさに誰もが救われた思いだった。

昭和二十年に入り東京の空襲も一段と頻繁ひんぱんになり、三月十日以降は首都圏が標的の様に襲われた。

四月十五日夜、突然の警報を受けて間もなく焼夷弾が投下され近所が赤く燃えあがり、あわてて母と二人で家を飛び出した。無気味なB 29の爆音を耳にしながら火の気のない場所を目指してさ迷い、歩き廻った。途中、子供を背負った母親の焼死した姿を見て愕然とした。夜空は赤く染まり退避行でのどもかわき、大森海岸駅前のカニ料亭の洗面所に飛び込み水をガブ飲みし一息ついた。

最後にたどり着いたのは平和島のなかであった。その一角には米軍捕虜収容所があり、偶然にも被害は皆無であった。翌日自宅の焼け跡に立ち、一面焼け野原となり第一京浜国道の側溝に焼夷弾の筒が無残に転がっている光景を見て悲惨な思いを深めた。

住む家を失い、父は従兄弟にあたる足立家の中野鷺宮の家へ世話になり同居させてもらった。足立家には男ばかり四人の子供がおり、軍人一家であった。長男は海兵<sup>注102</sup>、二男三男は陸士<sup>注103</sup>出身で服務していたが、昭和十九年に長男二男共に戦死する痛ましい一家であった。

間もなく、家を近間に見つけ引越すことになった。借り家は庭も広くあり、両親と共に食料として芋やカボチャ、トウモロコシ等色々のものをつくるのに熱心だった。

八月に入り、六日九日と新型爆弾<sup>注104</sup>が投下されたとのニュースが発表され、従来の防空壕では役に立たず横穴を深く掘る様、町会の勧めがあり、八月十五日も父と共に午前中作業を続けていた。昼に天皇陛下の談話があると知らされ、中断して玉音放送を聞いた。耳を疑った。敗戦を認める気持ちにはどうしてもなれなかった。その日は呆然とした長い一日であった。

内地配属だった三男も八月末には復員して来たが、軍人としての気骨を失わず毎日軍刀の手入れを行い、鬼神の様な近寄り難い存在であった。

彼の父親は時間をかけて冷静に説得を重ね平穏な家庭に戻った。

## 《機銃掃射の恐怖》

—戦時下四歳の記憶から—

水津 敦子（寿在住） 一九四一年生

鬼畜米英きちくべいえいからギブミーチョコレートへ…

昭和十六年二月、私は第二次世界大戦の最中に生まれ、物心つくまで四年半、戦争状態が当たり前という日々の中で育ちました。鬼畜米英という言葉の意味も分からないまま、唄うようにキチクベイエイと口にしていました。その幼児期が終わりかけた昭和二十年八月、国は戦いに破れ、全ての価値が変わり、世の中の有様も一変しました。例えば私たちはノミやシラミを駆除するということで、見たことも無いDDTという粉を全身に真っ白く振り掛けられました。そして最初に知った外国語がギブミーチョコレートでした。

そうした私が幼児期に味わった数々のショッキングな体験の中で、特に戦争中のある日の出来事は、その記憶がキレギレなのにも拘らず、あまりの衝撃さゆえに今なお鮮明に残り、決して忘れられなくなっています。その日のことは、その後の私の生きる道標となつて、今も事あるごとにフラッシュバックして私の心を揺さぶり続けています。

テッキは敵機だった…

それは昭和二十年の夏の暑い日のことでした。いつものように朝食を済ますと七歳の姉の聰子と四歳の私は麦藁帽子を被

って広場に遊びに行きました。たまたまその日は、三月十日の東京大空襲以後東京は危ないからと、新宿から我孫子町の我が家に縁故疎開していた小学六年生の栄市君も一緒でした。

広場は家のそばにあった国鉄我孫子駅のもので、駅前から官舎に続く広い敷地で、そこには早朝とはいえギラギラした夏の陽射しがたつぷりと降り注いでいました。広場の南側には繭から生糸を紡ぐ石橋製糸工場があり、当時は軍策による軍服や落下傘の布地作りの軍需工場にされていました。広場で三人は石蹴りや資材置き場の柵で鉄棒と思い思いに遊び始めたすぐの時でした。ウン？と何か体に異様な振動、風のような風でない、押し付けられるような変な圧力の流れを三人とも感じました。上から何かを押してくる？大きな虫の羽音のような音も聞こえてきます。と、突然、

「トシチャン、アツチャン！危ない！逃げる！テツキだ！」と栄市君が叫んだのです。空を見上げると飛行機が工場の斜め上から広場に向かって降りて来ます。最初はそれが何なのか分からず、ポカンと見上げてみると、見る見るうちに機体が大きくなりました。

「アツチャン！何してる！早くしろ！テツキだ！」という怒鳴り声にはつと振り返ると、姉たちは家に向かって走っています。私はあわてて追いかけてきました。でも二人の背中はどうも先に行ってしまう、心臓が口から飛び出しそうにドキドキし、待つて！マッテ！と焦りました。またそういう時に限って下駄の鼻緒が緩んで脱げそうになるのです。大人になった今でこそ、下駄など脱いで裸足で走ればいいのと思いますが、そのときはただただ足の指全部にギュツと力を込めて鼻緒をしっかり挟んで、下駄が脱げないようにするのに懸命でした。その足元でパッパッパッパッと土埃が上がり、小石が飛びまわりました。地面を這う銃弾が砂利に当たったのです。と同時に耳元でキュンキュンキュンという音が鋭く響いて弾が耳をかすめるように感じました。狙われているのが分かったのです。ヤメテ！アタラナイデ！その時の喉が詰まるような、胸が

張り裂けそうな怖さは今でも鮮烈に覚えています。タイヘンダ、タイヘンダ、ハヤクニゲナクチャ！と思うのに足がもつれるのです。コロндаラダメ！と念じながら必死に走るのに、わずか百メートルもない家がなかなか近づきません。歯を食いしばって、涙をポロポロこぼしながら走ってる目の前に突然母の姿が見えたと思った瞬間、体をすくい上げられ、押入れに放り込まれていました。押入れの座布団の陰に姉と栄市君が体をかがめて座っていました。その姿を見た途端、ガタガタ震えがきて止まらず、ワアワア声を上げて泣き出してしまいました。三人とも下駄を履いたままで。麦藁帽子が無いのに気がついていたのは大分後になってからでした。

戦争は終りですって書いて！

下駄の赤い鼻緒、乾いた砂利の白い道、舞う土埃つちぼり、日向臭い匂いひなたくさ、突き抜けていった弾の空気を切る音、それらがあまりに衝撃的で強烈であったために、たった一度の短い時間の出来事にも拘らず、私の心を深く傷つけました。以来二度とその広場に近づかないばかりか、ラジオから「東部軍管区情報」とか「臨時ニュースを申し上げます」との放送が流れるたびに「また来る？また来る？」と母の割烹着の裾を引っ張りくどく聞いていたそうです。新聞社に出勤する父に「お願いだから戦争は終りですって書いて」としつこく言って困らせたとか。以来六十五年、何があっても、ノウモア戦争と心から叫び続けています。

## 戦時中を生きて

鈴木 祥（緑在住）一九二二年生

焼け跡に残る三和土<sup>注105</sup>や手毬<sup>てまり</sup>つく

中村草田男

昭和二十一年春、終戦後の省線<sup>注106</sup>田端駅に立ち見渡す限り焦土の東京を眺めた私の視野には池袋まではつきりと見えその先は漠然と乍ら<sup>なが</sup>覚えている限り焦土であった。防空壕に三角屋根を立てかけた家やビルの残骸があり省線が走っていた。巢鴨、大塚に降りては歩いてみる。残骸の中に所どころ三和土<sup>たたく</sup>があった。この句はその三和土に手毬をつく少女を配し人の営みの哀しさ愛しさを歌っている。先生の優しい眼差しを感じさせられる。

此の文章は私の入っている俳句友の会秀句鑑賞に載ったものです。実際その頃私は新天地を東京に求めどうしたら自分の生活の糧を得る事が出来るか時折東京に出では焦土の中を歩き回っていました。二十四才の時でした。

話を戦前の記憶に戻します。これから綴るのは市井<sup>しせい</sup>の民として国家未曾有の敗戦の体験を味はった一人の女の記録です。昭和十八年五月私が結婚したのは大東亜戦の最中で従兄が戦地から帰還して何時又召集されるかも知れぬ身なので結婚させてやりたいとの願いから急に決まったのです。夫は翌十九年三月、召集令で群馬県沼田に発ち直ちに上海<sup>ちやうかい</sup>に向かい長沙<sup>ちやうさ</sup>戦<sup>注107</sup>に参加しました。男だけの三人兄弟の長男で次弟は青森県弘前連隊に入隊、末弟は大学の学徒出陣で出征する事になりその準備は私がする事になりました。と申しますのも婚家の義父は私の母の弟で入婿だったので一人娘の妻が早逝した為事情があつて別邸に住んで居り婚家は商家で塩の元売<sup>もとひり</sup>捌<sup>はな</sup>として一町十村（当時）の取引の塩小売人を扱う店だったの

で夫出征のあとはその仕事をやる様教え込まれました。八十才の祖母、番頭二人女中一人と私だけなので私が準備する他ないので。弟の軍備品等を求めて東京往復を何回か重ねた頃は毎日 B 29 の偵察機が太平洋上空から現れ警戒警報が鳴れば見知らぬ家の防空壕に入れて貰ったり戦局は日々深刻さを増していました。弟は出陣式の後船舶兵として四国に渡り輸送船警護の為音信が途絶えました。婚家には大きな蔵が二つあったので軍の徴用となり結城郡地方（茨城）に駐屯して居た農兵の日用品倉庫として使用される事になりました。商品の塩は長屋門の庫だけとなりました。塩の帳簿は官製品の為嚴重でした。その内に番頭が徴用され女中も置けなくなりました。女中の居ない生活は祖母には大変きつく私も苦労しました。それにも増して大変だったのは塩の空吠<sup>あきかます</sup>注108の再利用となり小売人の持参した空吠の整理でしたが小売人の方々が協力してくれました。戦争末期は貨車で運び込まれた塩吠を小売人の人達が駅の広場に積んでの取引となりました。小売人の勤労奉仕があつたので助かったのです。皆お国の為だと我慢したのだと思ひます。二十年四月頃から夫戦死の噂が流れ、六月部隊長が一時帰国し夫戦病死の様子を具に語って呉れました。既に夫は十九年九月十六日には亡くなっていたのです。然し哀しんでいる暇もなく防空頭巾を被つての夜回りや食料品の配給等仕事は山程ありました。

その年八月十五日倉庫警備の兵が集合。私も呼び出され倉庫の前にラヂオを備えて重大な話があるから姿勢を正して聴くようにとの訓示があり昼に昭和天皇の御勅語が天皇御自身のお口からラヂオを通して流れたのです。声を揚げて泣く兵隊、黙って屈み込んでしまう兵隊、暫らくは皆茫然としていました。大きなショックだったようです。兵隊達は倉庫を閉め明日来ると言って帰りました。翌朝庭が騒がしいので起きてみるとリヤカーや荷車を曳いて来た兵隊が倉庫を開け思ひ思ひに山のような荷物を積んで行くのには驚きました。隊長達が来た時は品物が少しばかりになっている所へ私を呼び大方持つて行かれてしまつたけれど欲しいものがあつたら貰つて呉れと云うのでスコップを一つ貰いました。このスコップは大切な終戦

の記念品です。駅で塩の取引の際に見た東京方面から焼け出されて来た人が大事そうに鍋一つ抱えた姿、髪を焼かれて傷を負った女人、それぞれ命からがら逃げて来たような姿で汽車から降りて来る人々の姿が幻のように浮かんで来ます。戦争は終わった―虚脱したような感覚でした。内地勤務の次男は戦後程なく戻り結婚していたので妻を実家に預けての軍隊生活だったが二人で東京郊外に住むようになりました。末弟は翌二十一年四月帰国後父の家に入りました。その後は商売は弟にまかせました。ようやく私に暇の時間が生まれました。祖母はまだ元気でしたから此の文章の冒頭の感想文はその頃東京へ出てみた私の姿と重なります。夫の遺骨が戻ったのはもつとあとでした。義父は私の母の弟ですから私に子が無いので末弟と逆縁させて家を継がせ弟もそう考へてゐる節がありました。その頃の祖母は弱り長生きをして恥をかいと云うようになりました。夫の遺骨が戻ったのは夏に入ってからで夫が亡くなったのは十九年九月十六日ですから葬儀の日付は早めに行うとの事で八月末となりました。三回忌も兼ねて行はれました。その頃は私も町の方々とも親しくなり婚家の不思議な構成の理由がわかりました。義父の妻（祖母の一人娘）が早逝そうせいの為花柳界の女を身請けして祖母の逆鱗に触れ女のみ出入禁止として別邸を作ったそうです。義父は時折訪れても祖母と顔を合わす事はありませんでした。夫が無事に帰ったら何事もなかった事です。その後が私にとって長い思考の日々でした。ちらほらと憲法改正が新聞に載り私にとって又とない此の時代の転機に遭遇しひとり舌よの荒波を歩いてみたかったです。新民法によって参政権が付与され婚家を出ても夫の姓を名乗れると云う事は大変な魅力でした。私は密かに独立の準備を始め編物教室を開く為の家を借り嫁入りの道具など一切は仲人に頼み五月三日新憲法発令があったので私が新生活を始めたのは五月十六日の事でした。生活への自信と希望を持っていた私はひとりでも寂しくはありませんでした。戦争によって変わった道を歩んだ一人の女の物語です。

## 東京大空襲「風と炎」

高橋 要（布佐平和台在住）一九二八年生

昭和二十年三月九日から十日の未明にかけて、B 29 の襲来により上空には焼夷弾の塊が数多く見られ、各所でこれが散乱し、またたく間に住宅火災が発生した。

空襲警報が発令され家族七人が少々の風呂敷包みを持ち父と母は別行動をとり、父と私は数日前に空襲で焼けた空き地へと逃げる。

ものすごい熱風が体にぶつかり火が炎となり追いかけてくる。衣類に火の塊が飛びついてきて油断すると火だるまになってしまう。二十米<sup>メートル</sup>位先の自宅は数分のうちに火の手があがり隣近所の住宅は更なる強風のためどんどん延焼していった。

そのたびに風向きは左から、そして反対側へと円形を画きながら、残った建物を焼いていく。そのような状態の中、避難する人は誰の指示もなく人が行きかう中、これが大群衆となり後を着いてくる人は段々と増えて来る。そして集団で葛西橋<sup>注</sup>109通りへと流れて行く。馬数頭も、火の恐ろしさから驚きながら人の間を通り抜けて行ったが、突然の強風で横倒しとなり人の上にまたがっていた。人も同じで後から来る人に押し倒される。大群衆はすき間もない位長く市電<sup>注</sup>110通りへと流れて行く。

風は更に強くなり立っていることも出来ずベルトをはずし電柱に体をしばりつけ通り抜ける人を見ただけだった。この時の風速は三十米位と言われた。

父はどこへ行ったか、わからず持ち出した品物を置いて皆と一緒に逃げようかとも考えたが、それも出来ず風の向きと戦いながら人々の流れを見ているだけであった。

火の粉は容赦なく吹付け一つの町が焼け落ちるのを待つようだ。その間は汚水であろうが水分を体にかけてが、強風が手伝い体には一滴もつかず水蒸気となって吹飛んでしまう。

その後新聞ではこれを火事嵐と報じていた。数時間の風と炎との戦いは終わったようだ。

夜明けの町並みは一変し焼野原となっている。近くの小学校も跡形もなく更地となっていた。見えるのは砂町<sup>注111</sup>のガスタンクと質屋の蔵しかない。強風のため焼け落ちた柱とか瓦もなくなっていた。土台のコンクリートしか残っていなかった。

どこへ行っていたのかわからなかった父が帰ってきた。あちらこちらに遺体があったが、よく頑張ったと言われた時は涙が零<sup>こぼ</sup>れた。その後すぐ母、兄、妹、弟達の無事な姿を見た時は号泣した。母の一行は砂町火葬場付近の防空壕を見つけ二ヶ所あったが片方は満員で、もう一ヶの壕は水が胸位あったが、やむなくそこへ入った。夜が明けた頃防空壕の水は全部蒸発していた。隣の防空壕は全員死亡していたと言っていた。九死に一生を得たのであろう。

母と父は別れ、母と兄弟は茨城の実家へと向かった。父は持ち出した荷物の処理がありすぐに行かなかった。しかし食物もない、知人も見当たらず、漏水している水を一時しのぎに飲んだ。一晩中の火災の中にいたため耳をやられ痛くなってきた。水で目を流すが先が見にくい。

その後、警察へ行けば何かあるかと思ったが誰もいなかった。昨夜皆が逃げた葛西橋通りには大勢の遺体が散在し、どぶ川には遺体が浮かび、道路脇には母親が赤ん坊をお腹の下に入れ、上から覆いかぶさるようにして母親の背中には油がたまっている遺体を見て親子の絆を見せつけられた姿であった。

途中消防署の前には消防自動車の上に三人から四人の消防士が、そのままの姿で遺体となっていたのを目撃した。今で言う殉職でしょう。どこへ行っても知り合いの人とは逢わず夕刻になると人影はまったくなくなってしまふ。暗黒の夜となる。土管の中で横になる。ときたまアメリカの飛行機の音が聞こえてくると又空襲かと思ひながら眠りから目をさますと外は何も変わらず焼野原だけであった。

漏水している水だけを飲む。父は葛西の知人の家へリヤカーを借りに行ったが、食べ物もなく、リヤカーもなかった。二晩目の夜、又土管の中で横になる。次の朝、目をさますが食物はなく又、水だけ。

今日で三日目、父がどこからかリヤカーを借りてきて田舎へ帰ることがきまった。持ち出した荷物を積んで動き出したが、最初の難関は小名木川<sup>注1,2</sup>の鉄橋を渡る際、父と私の力では坂を上ることは出来ず、よその人が応援してくれた。亀戸の駅の前に来た時は、高架下の駅の入口付近は逃げ遅れた人達の遺体が山のようになっていた。軍隊がトラックへ遺体を乗せていた。

これを見て感じたことは、下は火の海、上へ逃げようとする大勢の人で動けなくなり、煙にまかれ窒息したのであろう。恐らくホームにも多数の死者がいたと思う。

父のリヤカーを握りながら歩いていただけである。少年にとっては疲れと睡眠不足がたたり限界に来たようだ。夢の中をとぼとぼと歩いているだけで道路へ横になる。

父親に助けられ近くの農家へ入り四日ぶりに食事をさせてもらい生き返った。

最後に災害時の用意については、普段は取り揃えていても大災害に遭遇すると取り得のないものしか持ち出していない。水だけあれば一日くらいは持ちます。

## 第二次世界大戦時の私の体験

高橋 照子（つくし野在住） 一九二九年生

世界平和を心から願ひ六十五年前の記憶を辿りながら思い立って筆を執る事に致しました。十六才で終戦を迎えた私でしたが、十四才の女学生時には戦争に突入しており学徒動員令が国から出され国民総動員の戦いになっておりました。

私は、広島県呉市に住んでおりましたので呉海軍の軍需工場へ通っていました。呉軍構内を歩いて砲工部へ通って行く途中横目に戦艦「大和」や航空母艦、潜水艦等艦艇を眺め励まされながら工場に通ったものでした。

日本の戦局も二十年四月頃から次第に悪化しサイパン島守備隊の玉砕<sup>注1-3</sup>を告げられ身の引き締まるのを覚えていました。二十年六月頃、呉海軍工場も晝間にもかかわらず米機の波状攻撃に遭い工場の機能を失う程の打撃を受けました。工場内には幾つかの深い壕があり私たち十五名位でその中に入ったのですが爆弾の衝撃で全員悲鳴をあげ死を覚悟しました。米機の立ち去るまでみんな耐え、お互いに生きていた事に感涙しました。運よく壕の入口に十センチ巾の鉄板が塞いでいてくれたお陰で助かったようです。次は二十年七月一日の呉市街の焼夷弾爆撃が真夜中にありました。いつでも避難出来る状態で寝ていますので、そのまま真暗闇の中を五分位の処にある和庄<sup>注1-4</sup>の壕に、近所の方達と隣の内科の先生一家と走り入りました。五百名位の人が入れる迷路の様な壕でしたが、焼夷弾で焼けた建物の火焰がトンネルに入り込み五百名以上の人はその火焰で一酸化炭素中毒でみんな意識を失ってしまいました。意識を失うまでの苦しみに錯乱状態になり

阿鼻叫喚生地獄<sup>あびきょうわんいじじごく</sup>注15とはこんな状態だと思っっているうちに、私も意識を失い家族とも散り散りになりました。

全員意識を失い何時壕から引き出されたのか記憶がありません。全員に水をかけて下さいましたが、意識を取り戻した人は僅かでした。意識が戻らなかった人の死体が山積みになっていました。

私は喉を痛め声も出ず、目も少ししか見えませんでした。意識がぼんやり戻り家族を探しているうちに父、母、姉と奇遇としか云えませんが再会できました。亡くなった方に申し訳なく思いました。私たちは、父の生家（当時安佐郡祇園町西原）に身を寄せる事に致しました。そこには親戚が大勢集まり総勢十五、六人になりました。

父は八月一日から終戦まで広島日赤病院に国の指令で勤務していました。八月六日も何時もの通り可部線<sup>注16</sup>で出かけた。

私達は祇園の西原にいて青い淡い閃光を見ましたが、噂で広島弾薬庫が爆発したのだと聞きました。その内大田川の土手を怪我をした悲惨な形相でぞろぞろと大勢の人が歩いて来ました。家の前庭には多くの人が寝転がって助けを求め、水を欲しがっても死んでしまうという事であげられません。薬品もないし手の施し様がなく次々と亡くなられました。本家の前庭に積まれた多くの死体を伯父達と近くの方が茶毘<sup>たひ</sup>に付<sup>か</sup>して手を合わせておりました。父の消息がわからず心配でしたが、当日六日は市内に入る事は出来ませんでした。翌日母、姉、私と三人で父を探しに市内に入りましたが、多くの死体があちこちで燻ぶり、川という川は熱さで飛び込んだのか人の死体が白くふやけ、びっしり浮いていました。その様子が十六才の私の眼に焼きついております。父の安否を気遣いながら探しましたが見つかる術もなく三人は帰りました。避難所にいた父は三日後に帰ってきました。

母の実家は、現在の原爆ドームのすぐ側でしたので、すべて焼け祖母をはじめ家族はどこで亡くなったか未だにわからな

いそうです。

その後、一週間以内に市内に身内を捜し歩いた人が、次々と亡くなっていくのを見て、それが原子爆弾であることを知り不安な日々でした。

日本も日清・日露戦争<sup>注117</sup>と負けを知らない為、暴挙に走ったのでしょいか。

私の愛読書に孫子の「彼を知り己を知れば百戦して殆<sup>あや</sup>うからず」とありました。

第二次大戦で日本国民が味わった悲惨な体験を、次代を担う人にしっかり伝え、核兵器のない恒久平和を心から祈願せずにはいられません。

## 進駐軍の残飯に行列して

滝日 一子（寿在住）一九三四年生

まっさおの空に飛行機雲がひとすじ。昭和二十年八月十五日は眞夏の太陽がギラギラ輝いていました。私は国民学校の四年生、縁故疎開で母の実家の信州の南佐久<sup>注118</sup>におりました。

疎開つ子といじめられ、母の家は農家でしたので田植から稲刈り、畠の草むしり、子守り等々、二言目には半人足、役立たずといわれました。お世話になっているのだから頑張つて手伝わなくてはと子供心に思ったものです。でも都会育ちの悲しさ、やること皆のろまでよく叱られました。弟は集団そ開<sup>注119</sup>で信州の赤穂に。父母が東京の中野で家族はばらばら。

東京が空襲と聞けばいつも父母の安否が気になり、お月様に手を合わせ父母の無事を祈りました。八月十五日の所謂玉音放送は、ピーパーガーととても聞きとりにくいものでしたが、それでも戦争が終わったという事がわかり、天にも昇る気がしたのを覚えています。

もう警戒警報も空襲もないのだととても嬉しかった!!その頃は各戸にラヂオはなく、近所の家に皆集つて聞き、家に帰り戦争に負けたといったら、そんなことを言う憲兵に引っぱられると叱られました。子供心に負けたことより戦争が終わったということが嬉しく、これで父や母と一緒に住めるとすごく嬉しかったのです。東京の中野は三月十日の下町の空襲のあと、五月二十五日B 29の空襲を受け、炎を受け眞つ赤な空に黒い焼夷弾が雨が降るように沢山落ちてくる様子がとてもきれいだっただとか、近くの神田川が死体で一杯で、焼夷弾の煙で目がまっかになり何日も目があけられなかったと、信州の田

舎にやっとたどりついた父の言葉でした。家はもちろん焼け出され、焼け残りのトタンで囲ったバラックに住んでいるようで、母は丁度その時、草津温泉にいる母の妹の所に末の弟をつれて食料を買い出しに行っていて命拾いをしたそうです。

終戦後東京に戻り、バラック<sup>注120</sup>での家族全員の生活が始まりましたが、雨が降れば何十ヶ所もの雨もり。風が吹けば屋根を吹き飛ばされないように夜も寝ないで皆で窓を押さえました。食糧事情もとても厳しく、お腹はいつも空いていて、食べるものが頭の中をぐるぐる廻っていました。サツマイモのツル、フスマ等お米の粒は数える程の色々な物が入っている汁でした。その貧しいぞうすいという汁を母は自分は食べたからと「うそ」をいって子供達に食べさせてくれたのを長女の私は知っていました。竹の子生活<sup>注121</sup>という言葉が流行し、母の一番よい丸帯が米五升になったのも覚えています。進駐軍の残飯にもお鍋を持って並びました。ドラム缶から大きな柄杓でお鍋にあけてくれました。でもお肉が沢山入っていて美味しかったのです。買い出しに行つて取り締りという名のもとに全部没収され、空のリュックで半ベソで帰ったこと。没収という略奪である私達の血と汗の買い出しした食料は誰のものになったのでしょうか。

女学校は制服もなく、先生方も男の先生は国民服というつめ衿の洋服、女の先生はモンペ姿でした。入試問題には新円切換、預金封鎖等が出題されたのを覚えています。

私達子供にとつても大変な時代、でも大人の人達は命をかけての、言葉につくせない苦勞の連続だったと思います。二度と戦争はいやです。

以上



## 東京大空襲の体験を地震防災に（続き）

田中 威（青山台在住）一九三三年生

二〇〇五年、戦後六十周年記念平和事業の一環として、我孫子市が企画された「戦後六十周年平和事業記念誌」に市民の一人として、「東京大空襲の体験を地震防災に」という題で文章を綴った。今、読み返してみると、書き足りなかったことが当時十二才の私の記憶の中にまだかなり残っており、これを機会にできるだけ多くの事実を述べて、前回同様将来必ず必要になってくる地震防災の方面に少しでも役立てたいと思っている。

前回の文中でも述べたように東京に対する空襲は昭和十九年（一九四四）の暮あたりから昭和二十年（一九四五）の二、三月にかけて激しくなり、四、五月がピークであったように思う。私が体験した五月二十四、二十五日の大空襲は最後の大きなもので、東京の市街地の大部分は焦土と化した。ただその中であって幾つかの地区は焼失を免れて残っており、たまたま残ったものか、戦後の保存を考えて故意に残したものかは判らない。たとえば神田神保町の古書店街はほとんど無傷のまま残されており、戦後活字に飢えていた私達はほとんど毎日のように足を運んだものである。また後述の大空襲当日避難の途中通過した京王線初台駅付近も奇蹟的に残された。

話が横道にそれてしまったが、大空襲当時私の住家（借家）は今の渋谷区幡ヶ谷、京王線幡ヶ谷駅（現在は地下、当時は地上）から甲州街道沿いの商店街を通り中野方面に向かう住宅街の一面にあった。商店街にはあらゆる種類の店が揃っており、市場（今の大型スーパー）も二つあった。当時は鉄道の沿線は戦火を避けるために線路の両側の一定距離の範囲内は建

物疎開と称して建物の強制撤去が行われていた。私達のような子供も大人にまじって作業を手伝った。余談ではあるが、その時昼の休憩時に配給されたおにぎりの味は忘れられない。

私の住家の近くには京王線の線路、甲州街道、それらの北側に並行に走る水道道路（当時は人工水路）があつて、比較的空間が多く、他の人口密集地帯と違って一瞬のうちに猛火に包まれて逃げ場を失うようなことは考えられなかった。五月二十四日当夜日頃からの申し合わせの通り防火訓練の成果を今こそ発揮させるのだという組長達役員の人達の勇ましいかけ声のもとに待機していたが、そのうち周囲の状況は一変し、気が付いた時は母と二人で逃げ道を探していた。当時母は三十才年上の四十二才、一番元氣だった頃かも知れない。よく近郊の農村に重いリュックを背負つて買出しに出かけていた。私も何回かお伴したが、初対面の農家でもことわられることはあまりなく、いつの間にかある程度の米や野菜類を入手しており、無駄骨に終ることはあまりなかった。私と違つて話術がうまかつたのかも知れない。

また、話がそれてしまったが、焼失したわが家に戻つてみても悲しいという気が起こらなかつた。周囲一面焼野原なので気分が楽だつたのかも知れない。焼跡をみると、ピアノの残骸が横たわつており、一寸離れた所には父が持ち出そうとしたトランクが荷車とともに灰になつていた。家の前の防火用水槽はコンクリート製なので残つていたが、近寄つてみると上半身黒焦げの女性と思われる死体が座つたままの姿勢で見られた。水に浸つていたと思われる下半身はそのまま肉色に近かつた。とても正視できるものではなかつた。きつと逃げる途中地上を這つた猛火に包まれ逃げ場を失い、やむなく当時設置が義務付けられいつも満水にしておくことを強制させられた防火用水槽の中に飛び込んだものであろう。その他数多くの遺体が多くは焼死体として焼跡や路上に散見され、一〜二日中にトラックが何台か来て運んで行つてしまった。

とに角、幸運にも別行動で離れ離れになつていた父とも再会でき、わが家からは犠牲者は出なかつた。火傷のようなひど

い障害を負うこともなかった。今でも神に感謝している。冒頭にも述べたようにこの時の貴重な経験を少しでも次に来るであろう大きな災害、地震災害に対して役立てないか色々考えている。

空襲は空から爆弾や焼夷弾が襲ってくるものであり、それらを運んでくる航空機の来襲から予測できる。今懸念されている北朝鮮からのミサイル来襲も短時間ではあるが、予測可能であると思う。しかし、地震は地下からの地震波の急激な震動であり、現在の技術では正確な予知は不可能であると思う。地震の発生場所を東京と限定しても東京大空襲での被害地域は当時と今とは様相も一変しており、そのままの経験が直接役立つものとは思われないが、以下思いつくままに地震災害時の注意事項を述べてみたいと思う。

・防災グッズとして市販されているものは家族分揃えておいた方がよい。空襲の時備え付けを義務付けられていた鉄カブト（現在のヘルメット）、脚絆きやはん（ゲートル）、防空頭巾、水筒等が役立つことは言うまでもない。

・非常用の食料品、日常用の賞味（費）期限の長いものは一カ所に集めておくことと非常の場合に役立つ。空襲の時前文で述べた乾燥芋、乾パン等が役立つ。地震災害の場合一〜二日経つと公共の支援物資が支給されるようになると思うのでその間のつなぎとして何が適当かふだんから考えておく。

・現在各自治体で熱心なところは防災訓練を定期的に実施しているところが多いので、機会をとらえて是非参加して欲しい。空襲の時はあまりにも火のまわりが早く逃げるのが精一杯で訓練はあまり役に立たなかったが、地震の時は火災が阻止されたら余震を警戒する必要があるが、あまり急いで逃げることはないと思う。

・食料品以外の日用品で小物はこれも一カ所に集めておいて、日常はそれを使用し、非常の時はリュックか何かにつめて持ち出すと意外に役立つ。ティッシュペーパー一枚、爪楊枝一本、輪ゴム一コでもあると便利なのがある。

・医薬品も同様なことがいえる。特に持ち出さなくとも、自宅の一定の場所に保管しておく、必要な時に容易に持ち出すことができる。

・最後に常に隣近所の人達と仲よくしておく、非常の場合に物心両面からのサポートを授受できる。私の場合は空襲直後自宅の水道・井戸が破損はしていたが使用可能な状態だったので被災した隣人達に自由に使って貰って感謝された。こういう非常の場合一番必要なものは水であろう。

## 戦中の田舎での生活

田中スギエ（天王台在住）一九三二年生

田舎の町（福岡県羽犬塚町…現在の筑後市）で唯一人の空襲の犠牲者は、一級上の恵美子さん。昭和二十年八月十三日、久留米<sup>注1,2</sup>が空襲を受けているらしいと話しながら、私達は防空壕を早く仕上げて荷物を少しづつでも運ばなければ、夏休みだしとみんなで頑張っていた。

昼食が終り飲み水が無くなったから、弟と一緒に来ていた友達と二人で汲みに行ってくれと言うので、まさか機銃掃射なんて誰一人考えたこともないのに大きな木が茂っているあぜ道を通ってお宮さんの中に出て行くようにと何度も言っただけで聞かせて出て行った。

二、三分か四、五分か、ダダダダッと地響きがして地面が揺れ、土がパラパラと落ち、二人が撃たれたと走り出そうとした所に、ビックリしたと顔色を変えて、胴体が二つのロッキード<sup>注1,2,3</sup>が真上を通って行った。飛行兵の顔も見えたと、転がり込んで来た。

すぐ近くだったようだけど何処だったのか、誰が、と思うけど見に行くことはできなかった。明るる日に撃たれたのは恵美ちゃんともう一人居たけど、その人は三つ編おさげの片方がちぎり取られて助かった。数日後に場所を見に行ったら、二メートル置き位に国道溝の田んぼの稲が五、六株ずつ引きちぎられたように七、八個所あり、こんなに大きな穴になる程だから一発でもとても、とても、恐ろしいものだと思った。

私は十九年四月、女学校に入学した。学校迄六キロ余り、駅迄一キロ位歩いてそこからバスに乗る。バス通学。そのバスはバスの後ろに釜があり、薪を入れて燃やしてエンジンがかかれば乗り込んで行く。途中で動かなくなると、釜の横に積んである薪を入れて皆でバスを押し、エンジンがかかると又乗り込んで行く有様。

夏休みが終ったら六キロ位迄は徒歩通学と決り、六時半に家を出るが少し遅れると駆け足で行ったりした。秋、十月の行事のひとつに十里行軍<sup>注124</sup>【四十キロ】が決められていて、弁当は日の丸弁当、アルミの弁当箱はお国のためにと供出させられ、木で作った弁当箱で、水筒も勿論供出して、なし。朝六キロ歩いて学校に着き、二十分位で出発。途中小学校があると二十分休み、井戸水を汲んで呑み、又歩き、夕方やつと学校に帰り着いて解散。暗くなりかかった学校を出て、帰路に又六キロ歩く。現在だと中学一年生の年である。

一〜二年生は学徒動員はなく、農繁期には麦刈り、田植え、稲刈りなどの手伝いに行く。学校にも五〜六キロ離れた所に農場があり、春は茶摘み、梅の実を取る。芋植えなどは全員で、級単位で時々草取りもある。又、被服工場から荷物が届くと、優先的にその作業、軍服のボタン付け、軍帽のヒモ付けなどをして仕上げる。その間に授業がある。

昭和二十年四月、二年生になり、三年生は工場へと動員される。四年生は校内で風船爆弾<sup>注125</sup>を作るための作業。コンニャク粉をどろどろに、水を混ぜて糊を作り戸板のようなものに和紙に糊をつけて貼り、乾かし、和紙を縦横に何枚も貼り付ける。貼り方が悪くて、小さな空気が入っていたりすると使い物にならないとかで大変だったよう。風が吹いて、埃が立てば駄目だと校舎の中庭での作業だった。

四月頃になると空襲警報のサイレンが多くなってきた。登校中だったら学校に行かなくて様子を見る。十時までに解除にならなかつたら解除になるのを待って帰宅と決る。一回だけ九時五十八分に解除になり、走るようにして学校へ行ったこと

もある。

履物は靴などはなくて下駄、それも女物と男物の中間のような物に鼻緒は自分で作る。麻紐を父に作ってもらい、新聞紙をくるくる巻いて筒に縫った布に通して折型をつけたもの。雨に濡れるとすぐに新聞紙はボロボロになるので、雨の日は裸足で、下駄は胸に抱いて行った。

六月頃からは殆ど毎日、午後になると警報が鳴り、教室から出ないようにと言われたけれど上に行くのではない。西の空はるか遠くを B 29 は編隊を組んで行くので、窓から顔を出して数えたりした。今日は三百機以上だった、今日は二百九十位だとか云って。

夜、大牟田<sup>注126</sup>が空襲らしい。音は全く聞こえていないが、小高い氏神様の境内から見ていると、空は真っ赤になり、花火の火の粉が降るように焼夷弾が落とされるのがよく見えた。その時少し火を吹いたようにして飛行機のあかりがひとつ東の空を山の方へ飛んで行くのが見えた。

夕べのは B 29 だったのだろうかと話していたら、七、八キロ離れた村の山の中に落ちて、乗組員は全員。パラシュートで降りて無事だったとか。朝になり村人は竹槍を持って集まり、殺せと大騒ぎになっている所に、ハワイから息子に日本の教育を受けさせるために帰ってきた人が来て、なかなか話が通じなくてあちこちの方言を使ったりして話しかけ、やっと通じたところ若い兵隊だったそうで、「村の人達に怪我をさせたりしたら大変なことになるから」と連れ帰り、おにぎりを食べさせたりした由。戦争が終ってから、福岡に占領軍が来て、数日後に村人に有難うと御札に来て、胸をなでおろしたと聞いた。

私達の家の上は空襲に来て帰る時のコースだったのか、「南東方向に編隊を組んで通るだけだから日本が高射砲でも撃て

ばいいのに」と、庭に出て眺めていた。爆弾ひとつ、焼夷弾ひとつ落とすこともなく編隊を組んで。

或る日、ゴーゴーと飛んで行っている所に、パン、パンと音がして、撃ったと手を叩いていた所に一機が火を吹いて落ちて来た。やった、やったと言って居ると、真上で翼がちぎれたようになり、胴体と翼に日の丸がくつきりと見えた。

片翼はちぎれて胴体から離れ、五百メートル位離れた畠の中に、胴体はくるつと廻るようになり方向を変えて、田んぼの中に突っ込んで行った。男の人達が集まり掘られたが、(操縦者は) 見つからず、墓標が建てられた。

今夜は(空襲は) 佐賀の方らしい、星のきれいな頭上をゴーゴーと何時間位だったろうか、流れ星もいくつも流れた。

毎晩のように同じコースを帰るだけ、誰も何も云わないけれどいつ家の所にも、と思っただけ。二三日経って姉の所からどろりとしたこげ臭い砂糖が届いた。佐賀の砂糖工場が焼けて、溶けた砂糖が流れ出しているからと、皆が筑後川にかけてある大橋を這うようにして渡って持ってきているので、行って来たとのこと。酒一滴も呑まない父にと。砂糖など何年も見たこともないような時、指先につけては舐めながら、皆ニコニコ。

家から二キロくらい離れた小高い雑木林を切り開き、飛行場を作ると動員されて作業に行っていたのは十九年になってからだ。二十年初めから特攻隊の練習場とのことで、家の前を白いマフラー注127に特攻服注128を着た少年のような方が時々通われるのを見かけた。

飛行機は赤トンボと言っていたが、木で作られたものだったらしい。飛び立って高くあがると急降下を何回か繰り返すのが練習だったらしい。その頃には沖繩戦も終っていて、若いのに可愛そう、あんな飛行機で行くのかしらと話していた。

B 29にとっては眼中になかったのだろう、爆弾ひとつ落としに来なかったから。

昭和十七年夏、大阪の工場に勤めていた兄に召集令状注128が来た。すぐに南方へ行ったとのこと。ところが十八年春、

一年にもならないのに大きなトランクを二個持って帰って来た。その中には果物やチョコレート、クッキーなど店では見ることもなくなくなっていたものを一杯おみやげに持って。父と話しているのを聞いて驚いた。「どうして日本は戦争を始めたのだろう。無茶な戦争だ。アメリカの飛行機は銀のように白く輝いたアルミで作られている。日本のは泥で出来ているようなもので、それを見ただけで・・・。新聞には勝った、勝ったと書いてあるけれどもうちで負けていて、食料も軍需物資も補給する船は次々と沈められている様子だ」と。父は日本は神国だから、そのうちに神風が吹いて必ず勝つ、負けるはずはないと言っていた。私達もそう聞かされていた。

兄は、会社から必要な技術者だからと呼び戻されたのだった。

## 私の戦争体験

富樫道廣（緑在住） 一九三三年生

私の戦争体験は、昭和十六年十二月八日の朝のラジオで始まった。

「大本営発表。帝国陸海軍は今八日未明西太平洋上において戦闘状態にいれり。」というニュースである。そしてそのあとは軍艦マーチが鳴り響いた。その時私は小学校の二年生。尋常小学校は国民学校という名前に変えられて、尋常科は初等科というよび方になっていた。

私の父はその当時、中学校の教師で家が学校に近いこともあって朝早く起きることなどなかったが、この日ばかりはこのニュースを聞いてガバツと起きてきて、「バカなことを始めたもんだ。」と不機嫌な顔でつぶやいて煙草に火をつけたことを記憶している。子供の私にはなんのことかわからず、そのままそれゆけドンドンの国家総動員の太平洋戦争に巻き込まれていくわけだが、戦争に負けてその意味がわかったわけである。

家が学校に近かったことは先に言ったが、そのせいもあって、私が子供の頃から家には大勢の中学生が集まってきていた。多くのお兄ちゃんに遊んでもらって大変幸せだったのである。とくに夏休みには上の学校にいった卒業生がやってきて大変にぎやかになったものである。

戦争が始まる前は高等学校や専門学校の学生が、霜降りの夏服に、腰には手ぬぐい、デカンショウ<sup>注1,2</sup>をはいて来ていたが、戦争が始まると軍隊の学校がふえてきた。陸軍士官学校の生徒は長靴に日本刀の軍刀。直立不動で敬礼をする。され

たほうのオフクロはただオタオタするばかりだった。

とくに軍国少年の目に眩しかったのは 海軍である。

海軍にはいろいろあって、まずは霞ヶ浦の予科練。昔、私立の大学に予科があったように海軍の飛行機の操縦を訓練するのに気力、体力、学力を養う必要上の学校で、飛行予科練習生、略して予科練と言ったのである。陸上機、水上機両方の練習の適地として霞が浦に昭和十四年に出来たものである。中学四年からの課程を甲種予科練、中学二年又は高等小学校二年からの課程は乙種予科練と言っていた。後になって一般応募の丙種というのもあった。

戦中混乱の中、岩国、鹿児島、岡崎、出水などの全国に訓練所がつけられたが、初めの頃は大変な難関で、第一期生は六千人の応募者で合格者はわずかに七十九名という百人に一人という英才の集団だったわけである。

今年、土浦近くの阿見の跡地に「予科練平和祈念館」が開館した。昭和の少年たちの空へのあこがれを見ることが出来るだろう。

予科練の制服は、冬服は上下紺色だが、夏は上着が白。襟に桜に翼。七つボタンは歌にあるように桜に碇。

若い血潮の予科練の

七つボタンは桜に碇

今日も飛ぶ飛ぶ霞が浦にやあ

でっかい希望の雲がわく・・・

海軍の学校で次に上げるのが広島、江田島の海軍兵学校である。軍人の生き方を教えるためにイギリス海軍を手本に創られ

だが、そのイギリス人教師をして世界無比と言わせた世界一の日本の海兵である。ここにも江田島健児の歌というのがあって、これもお兄ちゃんたちに教えられて歌ったものだった。

ほうはい寄する海原の

大波砕け散るところ

常盤の松の緑濃き

秀麗の国秋津洲

有史悠悠数千載

皇ばく仰げばいやたかし

意味は何だかわからなくとも間違いなく歌えば海兵に入った気分だった。

この江田島は予科練以上の難関で、一つの県から一人か二人という狭さである。一号生徒から四号生徒までの四年間、卒業して少尉幹部候補生になる。

夏服は上下純白、腰きりの上着は七つボタンで左の腰には短剣を下げる。後ろの真ん中の腰から黒革のつるすベルトがいかに格好いい。純白の上下、碓の金モールの帽章と肩章はエリートの象徴のようで眩しくて目が眩みそうだった。

そんなスマートな軍服も負け戦が重なるようになると、純白の服はカーキ色に変わり、帽子は陸軍と同じ戦闘帽になっていく。

一期生は百人に一人という難関の予科練も終戦間際には、特攻の養成所となり、何万人もの集団になった。もう誰でも入

れるようになったらしい。

昭和二十年八月十五日、夏休みの暑い日だった。みんなが集まってラジオの前で天皇の声を聞いた。何だか分らなかったが、「日本はアメリカに降参したのだ」と父に教えられた。

学校に集まって教室でやらされたことは、持っている教科書を墨で消すことだった。修身、国語、歴史、地理・・・これらの教科書は墨だらけ。真っ黒になってしまった。それでも教師の「アメリカに復讐しようと思うものは・・・」と言われて半分以上が勇ましく手を挙げたのには驚いてしまった。

戦争が終わって、海軍の学校に行けなくなった無念さは残るが、四年前、戦争が始まった時、父がつぶやいた「バカなこと」と言ったのが忘れられない。

何故今もって戦争がなくならないのか。あの当時、日本が猪突盲進した力学はどのような仕組みで出来たものなのか今なお分らないでいる。

勝った国が負けた国を裁判する不思議なこともやった。

どんな国だって戦争はしたくないはずである。太平洋戦争でアメリカ国民の心を一つにしたのは、日本の真珠湾の「だまし討ち」だとされている。日米交渉の最後の通告が一時間遅れたためにこれを国際的な蛮行とアメリカに言われてしまった。日本人の背信、陰険、残虐・・・などイメージは悪いほうに蔓延してしまったのである。そう簡単には解けるものではない。戦争とは誰が、誰のために、何の利益を求めてやるものなのか・・・もつとみんなで考えたい。あまりにも大きな犠牲の出る「バカなこと」なのである。

以 上

## 兄へのレクイエム<sup>注130</sup>

豊島貞子（天王台在住） 一九三一年生

一九九〇年夏、私は厚生省援護局が実施したシベリア墓参団に参加することが出来て、初の墓参が叶った。その前年、朝日新聞の尋ね人戦後四十四年欄への投稿、写真入りで掲載され兄の抑留地ウランウデ<sup>注131</sup>を知っているという方からの連絡を受けて情報を得たものの、戦後生まれのその方は、留萌市<sup>注132</sup>の市議をなさっている時に留萌とウランウデが姉妹都市である関係から彼の地を訪れたということだけであった。

シベリア⇨凍土・飢え・悲惨の図式を想像しつつ新潟から飛び立って二時間、ハバロフスク着、空港に立つレーニン像が先づ目に飛び込む。

ソ聯機<sup>れん</sup>・バス・シベリア鉄道などを乗り継ぎ、チタ・ウランウデ・イルクーツクの墓地を訪れた。戦後初の墓参地だったチタは、荒れた墓地で折柄の俄雨<sup>にわかあめ</sup>に、待ち焦がれた喜びの涙をも悲しみの涙とも思い、胸が詰まる思いだった。

兄の眠るウランウデの墓地は午下りの陽光がふりそそぐ小高い丘の上であり、きれいに管理されてあった。のちにイルクーツク収容所<sup>注133</sup>から九死に一生の帰国をなさった方々と知り合い、抑留生活のさまざまを聞いた。

小さな窓ひとつの貨車で移動中に見えたバイカル湖を日本海と思ひ、糠喜びに精神の変調をきたした者、毒きのこに中り死亡したり、激しい労働と飢えが人間性も歪めていったであろうことも想像できる。死体を埋めるにも凍土では一晩中掘っても何糞としか掘れず、野犬の害にも遭うとのことだった。

兄の遺骨遺品とて何も無く、この墓の下にも無いのだろうと、お墓の土を撫でつつ込み上げる涙を流した。五年後二度目の墓参に行く。もう涙は出ないと思っただが変わりなかった。

兄は昭和十六年逋信省印旛地方航空機乗員養成所（民間）へ第十期操縦生として入所、同期に尾崎罌堂翁<sup>注134</sup>の双子の孫が居られた。弟さん戦時中死亡。兄行良氏は戦後JALのパイロットとして活躍なさった。今はニュータウンとなつている印西草深の地を訪れ、印西市役所に保存されてあつた資料から兄の写真とも対面できた。私の中にある兄は、いつになつても若い優しい兄のままだ。

## 東京大空襲を体験して

### —空襲被害者の人間回復を—

東京大空襲訴訟原告団 副団長 豊村 美恵子（高野山在住） 一九二七年生

はじめに

私は東京の下谷区上野で育ちました。一九四四年当時、家族は企業整備令で深川洲崎弁天町に転居し、両親と七人兄弟姉妹で、兄二人は出征（一九四四年長兄戦死）中でした。一九四五年三月十日東京大空襲で被災し、家財のすべてを失い、父、母、姉、弟の家族四人が水災死したのです。私は十八歳、上野駅出札掛徹夜勤務で不在でした。八月三日 赤羽駅で機銃掃射に遭い、右手を失い、戦後六十四年、苦難な自立困窮の過酷な運命を強いられ生き延びてきました。前線銃後の区別なく首都東京は【東京戦場】でした。国政府は、「国民等しく受忍義務Ⅱ我慢しろ」と国家最大の人災である戦争責任を一切認めません。事実を隠蔽いんぺいしたまま、戦争責任を放棄してきました。東京地裁に、二〇〇七年三月九日提訴・二〇〇九年十二月十四日判決「請求棄却」。ただちに、東京高裁に控訴しました。

家族の被災死

十日未明、B 29は駅上空を執拗しつように旋回し、頭上の爆撃音は凄まじく、落雷が体のなかを突き抜けるほどの振動でした。外の大災害には全く気づかず避難したのです。

上野駅に、早朝から真っ黒に焼け焦げた人たちで、見る見る溢れだし、構内は悪臭あふに騒然あふとしました。そのとき、窓口に、

弟が海から逃れてきて、ずぶ濡れのまま憔悴<sup>しょうすい</sup>し切って、家族の行方が分からないと言ったのです。すぐに帰らせてもらい、地下鉄日本橋駅の地上口へ出た途端、昨日までの町並は戦場さながら黒焦げの焼け跡に一変し、東京湾まで見渡す限りの焼死体や灰骨を見た瞬間、家族の安否は、と、絶望のどん底に突き落とされました。昭和大通り一面の灰骨を踏み身震いに耐えて歩きました。四方が川と東京湾に囲まれた遊郭跡<sup>ゆうかく</sup>地で焼け死ぬか、死の海に逃げるしかなかったのです。父、母、姉、弟の四人が水災死です。海面に盛り上がるほど着物姿の死体の浮遊を目に、足がすくみ体が引き込まれそうな恐怖心に駆られ、家族の哀れさや悲しみが沸き溢れる涙で見えなくなりました。

人間をこれほどまでに痛めつけたこの惨劇は生涯忘れられません。七日目に母が引き上げられ、懐に私の貯金通帳があったと渡してくれました。勤務で不在の娘を不憫に思い、暗闇のなかを探し出した母の必死の心情を思い、そのために逃げ遅れたのではないかと。親の愛の深さに触れ、目は涙で一杯になります。すぐに数百体が入る土穴に投げ込まれました。身元がわかっても弔う事が出来ず、墓地に遺骨はなく、墓参は空虚になり、心は悔恨の情に苦しみ悔やみが疼きます。

国の命令で、家では軍服縫製工場に転換し、防火を死守したために犠牲になり水災死したのです。家族四人が名前を持った人間として生きた証に、氏名の刻銘された追悼碑を建立することが命<sup>いのち</sup>が<sup>け</sup>の<sup>祈</sup>願<sup>です</sup>です。

#### 八月三日の機銃掃射

朝十時ごろ、勤務明けの帰宅時、赤羽駅構内の国電が機銃掃射で銃撃され、私は右手負傷。右半身真っ赤な血に染まり、すぐに意識朦朧となり、目は見えない、口は利けない声がでない、歩けない。ホームに一人取り残され「このまま、出血多量で死ぬしかない？」（ふと親の死に際を思い浮かべた）。いま……けがをしたのだからなんとか気力を振り絞って見よう、よろけつつ改札に倒れこみ、病院に行く道端で応急手当を受け、九死に一生の命を援けられました。手は切断されました。

頼る家族、家財のすべてを失い、孤児同様浮浪し、日常生活のすべてに両手のない不自由さ、世間からは厄病神を背負い込むような目で見られ、世話になれるところはありませんでした。（戦争のためなのに）

生活苦から肺結核、転倒し大腿骨頸部骨折して重度障害になり、自立困窮の苦難を生き延びてきました。短い手で、無理な動作をするので上半身が変形湾曲し、痺れ、痛みが強くなり我慢のしようがありません。

戦後六十五年 平和への願い

・戦後、多様な戦争被害者援護のうち、最後に一番被害の多い空襲被害者だけが差別され、見捨てられ、放棄されてきているのです。空襲被害者は高齢になり語り終えてしまうのです。平均年齢七十七歳、最高齢九十一歳。

・「平和は、人間の生存すべての人権の前提であって人権の尊重なくして真の平和はない」（第二十六回人権擁護大会）。東京大空襲裁判についても空襲被害者に対する国の政策は、憲法の個人の尊厳と人権、そして平和理念にあっていないのです。「人生被害」最後の生命を賭して、国の姿勢と責任を問いただし、人間の尊厳と人間回復を求める集団訴訟に立ち上がったのです。提訴を決意するのに、六十二年の歳月が必要なほど生易しいものではありませんでした。

・〇七年三月九日 提訴の記者会見です。「私たちが被害を受認したら、戦争は正しかったことになる。何回も戦争をやつて、国民がどんな被害を受けようと、国は受忍義務だと言えば済む。お金じゃないんです。国が何もしなかったことを。事実を知って欲しい。そのために被害者がどれだけ苦しんできたかを」心の叫びのような言葉は原告団の思いを象徴しているのです。

## 私の戦争体験

中田 實（船戸在住）一九三二年生

阿蘇の外輪菊池溪谷を水源とする菊池川は途中の村々の田畑を潤して有明海に出ます。この恵みの川の下流西側に

（現・玉名市）があつて、そこが小生の郷里です。家のすぐ裏は石垣の堤防で金比羅社が祀つてあり桜の木々に取りまかれ、堤防には更に楠や櫟の古木がずらりと茂つていて、川向う東には木葉山このはやま、鉄橋の南には三の岳など眺望され、川岸は白砂、そして小魚が泳ぎ蝦えびを追いかけた裏の川は、子供の頃一番の遊び場でした。江戸時代には藩米を大阪へ送るための御蔵や俵ころがしの船着場が残っています。明治十年の西南の役では薩摩軍が川を渡り、高瀬まで北上し街の一部が戦災に逢いました。

太平洋戦争が後半に入った頃、川向こうの丘の上空を旋回しては着発の練習を繰り返し練習する赤トンボ注135（小型練習機）を思い出します。我が家の防空壕は家の裏庭の一隅を掘って作りましたが、幸いに度重なる空襲には焼けなかったのですが、時々艦載機の低空攻撃を受け、その時は冷や汗をかいたものです。

その頃、この辺りで一番の稲作地が埋め立てられ、赤トンボの飛行場作りに汗を流したことは特に忘れることは出来ません。この飛行場は特攻隊の基地で、ここから飛び立つ予定の飛行機は、八月十四日出撃命令が出され、その準備中八月十五日終戦となつてしまつたようです。

国民学校注136（小学校）の五・六年生の頃だつたでしょうか。飛行場の開隊式に参加し、この時は何時もの赤トンボで

はなく少し大きな単翼の爆撃機から、まだ見たことのないような落ち傘を投下する催しでした。なかなか到着しなかった飛行機がやっと低空で飛行場の上空を旋回した後、目前で投下され大きく開きかけた落下傘が尾翼に引っ掛かり、飛行機は前に進めなくなり墜落、炎上しました。一瞬の出来事でした。搭乗員は亡くなりました。その一瞬の光景を今も思い出します。

中学入学は終戦の年四月、一週間も学校に通ったでしょうか？上級生は二年生だけでした。一緒に学校の近くの山林を開墾する作業に明け暮れました。さつま芋を植えるためでした。

開墾予定地に着いて、まず林の中に自分の身を護るために入る蛸壺注137といわれる一人用の壕を掘りました。空襲時の爆風除けですが、手に水腫れの豆がいくつも出来ては皮が破れ慣れぬ作業は大変でした。笹竹の根、茅の根を掘り出すのに鍬や円匙えんぴ注138を使いこなすのは十二歳の少年には大変でした。一生懸命でした。

この頃はもう日本の飛行機は飛ばず、米軍のB29や艦載機が連日のように北九州の工業地帯爆撃に頭上を通過していました。中学の三年以上は荒尾や大牟田の工場へ爆弾や兵器作りに動員されていてとても心配でした。毎日編隊を組んで飛ぶ敵機の凄まじい勢いに圧倒され壕の中でみんな首を縮めておりました。

時々、出征軍人の農家に手伝いに行きました。男手がたりない農家では大いに歓待して頂きました。当時食糧不足でしたので腹いっぱいおにぎりを食べさせてもらえるので、農作業はとても楽しみでした。この頃飛行場は度々爆撃され大穴の復旧作業に駆り出されました。飛行場には既に飛行機の姿はなく、格納庫の代わりに使っていた竹藪には、紙の箱で作った偽飛行機が置いてあったのには驚きました。

川の鉄橋を挟み、向こう岸の丘の上に高射砲陣地、手前の堤防、鉄橋の下の方には海軍の機関砲陣地が出来ました。そし

て事件が起きました。米軍の艦載機が飛来した時、一機低空で町を襲いました。その時、川の両岸からその敵機を目掛けて弾が発射され、どちらの弾が命中したのか、その敵機は高压送電線に引掛かり炎上して堤防近くの藪の中に墜落しました。その残骸を見物に多くの人が訪れ、中には黒焦げになった搭乗員を棒でたたき人も現れました。終戦間際に又々爆撃され大穴があいた飛行場に円匙をかついで作業に出かけたその日が八月九日、小生は別行動で見なかつたのですが、西の空に閃光と爆発による赤い雲、黒い雲の凄かつた光景を忘れられないと友は言っていました。父も同じ光景を家の裏の堤防から見たと聞きました。それが長崎の原子爆弾の投下でした。

小学校三年生の時から六年生まで、私たちを育ててくださった担任の先生は、四月に軍隊に招集され広島で被爆され、間もなく原爆症で亡くなりました。無念でなりませんでした。

私の長兄、次兄共に飛行兵として、ソロモン群島や、フィリピンのマリキナ方面で戦死して戻ってはおりません。二人とも二十一才の若さでした。あれからやがて六十五年になります。今日、再び戦争というあやまちを繰り返してはならないと思います。広島・長崎も被爆六十五周年を迎えます。核兵器の廃絶とそして世界平和のために戦争のない平和な社会の実現を願っております。

## 原子雲を見た日

長藤 梅子（新木野在住）一九二〇年生

月日は夢のように過ぎ、終戦より今年で六十有余年経ちました。

振り返りますと、決して平坦ではなかった二十世紀も特にあの原子雲を見た事が、一番鮮烈な印象として残っております。広島での阿鼻叫喚あびきょうかんもさることながら、少し距離を置いた江田島江田島での体験を書いてみようと思います。

私共は、昭和十六年に結婚、戦争の為家庭を持てたのが十八年春、海軍兵学校の分隊監事兼教官として構内に官舎を頂いてからでした。当時は戦局は苛烈かれつを極めて参りましたが、江田島はまず平穩で、凛々りんりしい生徒さん達を中心に私達にとりましても人生一番張り切った充実した毎日でした。十九年には長女も産まれましたが、その頃から空襲が激しくなり、運命の八月六日を迎えました。

その日は朝からよく晴れて、前夜は珍しく警報も鳴らず、私は手紙を出しにポストまで出かけました。帰路家まで十メートルとなった時、不意にマグネシウムをパツと焚いた様に辺りが真黄色になり、驚いて駆け戻り玄関を開けた途端、爆風に背を押され、前につんのめりました。何が起きたかも解らず、子供を抱いて震えておりましたが、空襲警報は後になって鳴りはじめ、不意打ちを受けたのだと思います。

夕刻帰宅した主人から、広島に新型爆弾が落とされ、深刻な問題だと聞かされました。取り敢えず雲を見に庭に出ましたが、古鷹山古鷹山の向い一杯に毒々しいきのこ雲がひろがり、数日は消えなかった様に思います。

翌日子供が風邪気味の為校内の診療所へ行き、そこでの異様な雰囲気につかれました。大人車に乗せられた農家の主婦とおぼしき方々で一杯で、まるで古寺の金仏の様になっておられ、正視できませんでした。

家族の方はタオルで冷やし、おろおろ看護に懸命でした。私はその場にいたたまれず、お大事にと告げ早々に帰宅いたしました。

江田島の婦人会が広島師団の草取りの奉仕に行かれ、災難に会われた由です。

その後数日で終戦になり、あの方達の受けられた苦しみは如何ばかりかと偲べれます。終戦の日、庭の松の木に蝉が数かぎりなくぞろぞろ登って居るのも不気味でした。

玉音の あの日も今日も 蝉しぐれ 梅子

## いまだ網膜に息づく鮮烈な記憶

中村 宏（寿在住）一九二三年生

はしがき

昭和二十年八月十五日敗戦。六十五年を経た今でも、私の網膜には焼き付いて消えない苦しい、悲しい思い出が沢山ある。私は昭和十九年四月、幹部候補生を志願し、浜松の中部九十七部隊（九十七式爆撃機と呑竜の二種）に入隊した。

三ヶ月の厳しい教育期間も終り、大部分の仲間は現地教育の名のもと、沖縄・台湾へと。

私は六ヶ月の研修をと、立川整備学校に派遣された。

その間に東京ではB 29の初空襲があり、我孫子では千浜校長をはじめ、多くの女子教員が手賀沼で遭難する事故があった。親戚の中村良子もその一人として亡くなった。

立川の研修も終わり、一月に原隊に復帰、直ちに三方原飛行隊<sup>注141</sup>に転属が命じられた。

その三方原飛行隊で過した一月から八月十五日敗戦までの七ヶ月、この僅かな期間に体験し、いまだに生き続けている記憶の幾つかをとりあげてみたい。

### ① 少年飛行兵の血の叫び

三方原陸軍飛行隊は、本土決戦のための、特に上陸用舟艇<sup>注142</sup>や展開する兵士を攻撃することを目的としていた。

二月の晴れた冬空に響く、異常なエンジンの音。ふと見上げると、高等練習機が舞い降りてきた。降り立ったのは十六才の少年飛行兵だった。修理の間、少年はじっと一点を見つめている。その視線を追うと、そこには「隼」（一式戦闘機）の一機。少年の口から、「一度でいい、あの飛行機に乗ってから死にたい」という叫びが漏れ、握ったこぶしを突き上げた。整備が終わった機に少年は戻り、手を振り知覧<sup>ちらん</sup><sub>注143</sub>へ飛び立っていった。振る手を見つめる私の眼はだんだん霞んでいった。その想いは今も鮮明だ。

## ② 対空射撃で散った二世兵士

同じ隊に、父を外国人に持つ仲間がいた。敗戦を迎える年には、B 29の爆撃はいうまでもなく、飛行場にはグラマンやP 51、ボートシコルスキーといった単発をはじめ、双発の攻撃機の来襲が定期便化していた。

隊は邀撃（ようげき）<sup>注144</sup>するため、航空機用の二十ミリ機関砲や、八ミリの旋回機関銃を使うことになった。

そのために通称※「タコツボ」※を掘り、その中心に銃の台座用として五く六寸角の柱を据えた。

邀撃方法には鉄則があった。それは敵機が頭上の一線を越える寸前から通過するまでとする。敵機は直ちに旋回反転して攻撃してくるから、タコツボの底に這いつくばるのが基本。身を守る鉄則であった。

彼は頭上を通過する正面から射撃。旋回して反撃してくるP 51と真正面から勝負した。二十ミリ機関砲弾は、彼の腹をそっくりえぐりとり、即死した。

彼がP 51と一騎打ちした心の中（母？父？）は何い知ることではできない。戦死者は彼一人であった。

③ 撃ちこまれた深紅の鉄・鉄

敗戦も迫る頃、制空権を手にしたアメリカ艦隊は、太平洋沿岸の軍関係の施設に艦砲射撃を加える行動をおこした。

北海道室蘭↓岩手の釜石↓茨城日立の順に、軍需生産施設を粉砕した。砲弾はそれでも余ったのか、最後に浜松市の焼け残った施設を攻撃し、去った。闇夜、艦載機の落とす照明弾、その一点に真っ赤な一抱えもある火の玉が注ぐ。二時間近い攻撃で身軽にして？浜松沖から消えた。

翌朝、市内の処理に出かけた。道路に転がる死体は、防火用水に上半身をつっこみ下半身は焼けただけ、五体満足な死体は殆どなかった。「地獄絵」。忘れることはできない。

あとがき

「厚木に進駐軍総司令官マッカーサーがくる」との情報。中隊長から関東以北の出身三十一名の兵士の名簿が渡された。八月二十八日にこの兵士を引率して復員するように指示された。当日は階級章・軍刀は平常どおりで浜松駅へ向かった。貨車に三十一名を載せ、二日ばかりで東京へ。ここで解散。私は母の疎開先我孫子柴崎へ。そして翌日、住まいのある横須賀に向かった。

昭和二十三年、正式教員になるまで、多くの苦しい体験をした。食うため、家族を養うための敗戦服の「ハタチ」は、あるときは進駐軍の自動車修理工、あるときは進駐軍の物資の闇屋、はたまた舗装工事の孫請負業など等。

昭和二十二年には代用教員になったのを機に、神田の古本屋で受験用参考書をあさり、一に二に、勉強に努める。また帰りに、秋葉原でラジオキットを買い求め、「スーパー二段」のラジオ組み立て、農家に持ち回り、米や野菜と交換したこと

もあつた。

苦しかったが振り返ってみると、一番充実した日々だったように思う。



※タコツボの図

## 風化させない

白田 愛（我孫子在住） 一九九二年生

私は、平成十八年度我孫子市平和事業広島市平和記念式典中学生派遣の一員として、広島市に行かせていただきました。そして、現在は我孫子市平和事業推進市民会議に、委員として参加させていただいています。

こういったとても貴重な経験の中で、私が最も強く感じてきたことは、原爆のこと、戦争のことを絶対に風化させてはならないということです。

正直に申しますと、私は、中学二年のとき広島派遣中学生に選ばれるまで、全くと言っていいほど原爆について知りませんでした。小学校の歴史の時間では習ったと思いますが、それからはあまり原爆のことについては思い返すこともありませんでした。

ですから、平和記念資料館に行ったときには、ものすごく衝撃を受けました。人の影が映った石、焼け焦げた弁当箱、被爆後を再現したジオラマ……。本当に恐ろしかったです。それから、被爆者の方から直接お話を聞いて、一発の原爆がたくさんの方々の体と心に、今でも残る深い傷跡をつけてしまったことを知りました。今までこういった事実を知らなかったのだと思うと、なんだかとても怖くなりました。

我孫子に帰ってきてから私は、少しでも多くの人に原爆被害について知ってもらいたいという気持ちで、原爆についての小説を書いて「我孫子市めるへん文庫」（小中高生のための創作童話コンクール）に応募したり、自分の中学校（白山中学

校)で、広島派遣のときの写真をスライドにして発表会をしたりしました。

そして、それから二年半後、中学校の生徒会の先生から、我孫子市平和事業推進市民会議参加のお話をいただきました。市役所の方々など、たくさんの大人の中で、私のような者が役目を果たすことができるのだろうかという不安が大きかったのですが、自分のできることが少しでもあればと思い、毎月一回参加しています。

会議の活動は、私が参加した派遣中学生に関すること(報告会では司会をさせていただきました)や、戦後六十五年記念にどんな平和事業をしたいかなどを話し合うことが中心です。最初の二、三回はかなり緊張していましたが、会議の委員のみなさんはすごく優しく、未熟な私の話もきちんと聞いてくださるので、自分の意見を言いやすいです。

こうした活動をしてきて、私自身とても勉強になり、本当に良かったと思います。原爆のことや戦争のことを知らないという人が一人でもいなくなればいいと願います。かつての私のように、何も知らないという人がたくさんいると、もしかしたらまた、同じ過ちを繰り返すことになってしまうかもしれません。絶対に、絶対に風化させてはなりません。

これからも、小さなことでも自分から平和のためにできることを見つけ、実行していけたらいいなと考えています。

## 太平洋戦争体験記

橋村伸一郎（新木在住） 一九三七年生

私の太平洋戦争体験記は、出身地の高知県南国市岡豊町（旧長岡郡岡豊村）と、疎開先の高知県吾川郡いの町脇ノ山（旧土佐郡本川村脇ノ山）で、昭和十九年国民学校一年生から二年生の終戦直後までの経験に限って綴ったものである。

昭和十九年国民学校入学当時は、奉安殿ほうあんでんと言う天皇・皇后両陛下ごしんえいの御真影を奉納する建物があり、登下校時には必ず、この建物に最敬礼を行っていた。又「修身しゅうしん」という道徳教科書の朗読時に、皇室に関する箇所があれば、瞬時に総員起立し最敬礼を行わねばならなかった。天皇陛下は日本唯一の大元帥だいげんすいであり且つ生き神様であると教えられていた。

紀元節きげんせつ・天長節てんちやうせつ・神嘗祭かんなめさい・新嘗祭にいなめさい注 145・入学式にがくしき・卒業式等公式の行事の際には、教育勅語ちよくごを校長先生が恭しく「朕惟ちんおもフニ我が皇祖皇宗國ヲ肇はじムルコト宏遠こうえんニ…」と読み上げ、終わるまで最敬礼の姿勢を崩す事が出来なかった。

入学して暫くすると、近所の青年の家々に召集令状（赤紙）が来て「逢坂峠おうさかとうげ」というバス停で出世兵士を見送ったり、戦死者の英霊の出迎えが多くなってきた。

昭和二十年春、学校の行事で「前浜まえのハマ」と言う軍用飛行場近くの海岸に出向した時、敵のグラマンが一機超低空で飛来した。これが飛行場と高知市の空襲の前触れであった。学校では避難訓練が始まると同時に校舎は軍隊と共用となった。校庭では匍匐前進ほふくや銃剣術等の訓練が行われ、藁人形わらを銃剣で突いていた。そのうち空襲が始まった。夜の空襲は焼夷弾しょういだんのヒューンと言う落下音の後に、炸裂して燃え上がる炎が夜空を焦がしていた。

そうこうしている内に、敵が土佐湾に終結して飛行場付近から上陸し、地上戦が開始され全員皆殺しにされる、一家に一人は生き延びなければならぬ、該当者はすぐに疎開しろとの指示が出て、長男である私が疎開する事となった。親戚一同も同様に疎開者を決め三家族の疎開者と荷物運搬役の親兄弟総勢約十人が食料、家財道具、教科書等を満載した大八車とリヤカーを引き、伯母の出身地である現吾川郡井野町脇ノ山を目指し、約八十五キロメートルの疎開行軍に出発した。時、恰あたかも昭和二十年七月中旬の事であった。

出発して約二キロ進んだ所で、悲惨な光景に遭遇した。それは高知市の空襲で焼け出された大勢の人々が、持てるだけの荷物を両手で抱え道路端の山に向かっている事であった。山では既に竹でプレハブ小屋を作っている人もいた。高知市に入ると一面の焼け野原の中に、B 29爆撃機の大きな残骸が目についた。大勢の人々が機体を取り囲んでいた。私も物珍しきもあり、操縦席に座ってみた。初めて外国の飛行機に触れて興奮したものである。

山道を三日三晩の野宿を重ね、ようやく目的地に着いたのは実家を出てから四日目の事であった。国民学校二年生の子供であったが、この行程が辛かったという記憶は全く無い。

疎開先では「脇の山国民学校初等科二学年 生徒番号十二番」に編入された。同校は複式学級で一・二年、三・四年、五・六年生が、夫々一教室で勉強していた。それぞれここには敵機の襲来も無く長閑な学校生活と、川遊びや釣りを覚えた貴重な経験の場となった。食事は戦時中の事でもあり、どの家庭も麦・粟・稗・芋が常食であった。

今も手許にある当時の出席簿を見ると七月十二日間、八月二十四日間、九月五日間出席、在学期間九月五日迄となっている。足掛け三ヶ月の疎開生活を送った後、昭和二十年九月上旬実家に帰宅した。

終戦後将校に依頼して、戦車の運転を行った事がある。車の丸ハンドルと違って、レバーハンドルで操作するようになった

ていたのに驚いたものである。終戦処理の一つに弾薬の爆破処理があった、これは学校から約十三キロメートル離れた海で行われたが、ズドン・ズドンと言う音と共に窓ガラスが揺れ、その都度授業が中断されたものである。

傷痕軍人の路上の物乞い・裸体の子供浮浪者・闇市・闇屋・闇米<sup>注146</sup>・ズルチン<sup>注147</sup>・サツカリン<sup>注148</sup>・鯨肉・芋の蔓<sup>つる</sup>・麦飯・点け木<sup>つぎ</sup><sup>注149</sup>・素焼きの鍋釜・ノーパンタイヤ自転車・木炭エンジンバス・煙草の手巻き道具等も終戦直後の忘れられない光景である。

戦後六十四年の星霜を経て、世界第二の経済大国に成長した現在の繁栄は、終戦当時は誰も夢想すら出来なかった事である。国の為、尊い命を捧げ<sup>たか</sup>、繁栄の礎になった方々に、感謝の念を忘れてはならない。又実際に戦争を体験した私にとって、戦争ほど愚かで無駄な事はないというのが実感である。現在世界の各地で紛争が続いている状況を見るにつけ、胸が痛む思いである。恒久の世界平和を祈念し筆を置く事と致したい。